

# 路上生活者の個人史

## 第 17 回

竹中尚文

長野 治一郎 氏(仮名)

1970 生まれ。55 歳

私は岡山県倉敷市で生まれました。昭和 45 年生まれですので、今年 55 歳です。家族は両親と妹と祖母の 5 人家族でした。母親は私が 5 歳の時に癌で亡くなりました。妹は 3 歳でした。母親の記憶ですか？ 一所懸命に働いていた記憶しかないのです。病気になって亡くなっていく記憶は、ほとんどないです。母親が亡くなってからも、祖母と妹と 3 人で内職をしていました。内職の収入と祖母の年金で何とか暮らしていたのです。父親はサラリーマンでした。その給料は自分が遊ぶことに使っていま

した。

倉敷で小学校と中学校を卒業しました。生活がきびしいので、中学校を卒業すると就職しました。食品工場でした。私の勤務地が寮から遠かったので、始発の電車を出かけて、帰るのが終電でした。さすがに厳しい勤務なので先輩に誘われて、1 年ほどでその工場を辞めました。16 歳の時に、祖母が亡くなりました。その頃、父親は女の人と出て行きました。中学生だった妹は親戚に引き取られました。私は寮のある会社に就職しました。繊維関係の会社でした。繊維関係ですから、仕事は肉体的にはしんどくなかった。ただ勤務時

間は長かった。朝 8 時から翌朝 5 時まで仕事をしたことがあります。あの頃は、そんな勤務形態の所は珍しくなかったですよ。いくら働いても残業代は 1 時間分でした。こんな仕事は続きませんでした。2 年ほどで辞めました。18 歳でした。

それからは、派遣の仕事です。岡山を中心とした地域のあちこちで仕事をしました。21 歳ぐらいまで派遣の仕事をしていましたが、辞めて大阪に出てきました。建築会社で仕事をするようになりました。30 代半ばの頃に耐震偽装事件があって、建築の仕事が急激に少なくなりました。失業です。それからは日雇いの土木の仕事しかありませんでした。20 年ほどになります。最近では身体もきついし、なかなか続

かなくなってきました。そんなことで、ここに並んでいるのです。最近、なんとか生活保護をもらえるようになったので、アパートで暮らしています。生活保護の大半はその家賃で消えますが、トイレも使えないボロアパートです。食費はとても足りないので、こういった炊き出しに並ぶのです。

妹ですか？妹はわりに早く結婚しました。それから、あんまり連絡は無くなりましたね。私がこんな生活をしているからかもしれない。そうですね、家族？家族を持つ機会がなかったように思います。結婚なんて、考えもできませんでした。今、人生を振り返ってみるともうちょっとラクに生きてきたかったですね。

私たちの社会では、家族がそれぞれの個人の後ろ盾になっていることが多い。義務教育を終えたとはいえ、巣立ちの年齢を前にして家族を失った人は、どうすればいいのだろう。話を聞いて、お母さんはどんな思いで亡くなったのだろうと思った。おばあちゃんはまだまだ死ねないと思いながら亡くなったのだろうか。妹さんはどんな結婚をしたのだろう。